

成績不振・無気力傾向をもつ生徒との面接を通じて

杉 崎

*
巖

I はじめに

成績不振、無気力傾向をもった生徒が近年著しく増加しているように思われる。ひと口に、成績不振、無気力といっても、その原因や様相は千差万別であり、また社会的な要因も決して等閑視できない。しかし、ほとんど同じような社会的、環境的要因の下におかれていると思われる生徒が、一方では何事につけ積極的で、活気に満ち溢れており、他方では成績不振かつ無気力な傾向にあることを考えてみると、ただ性格の相違ということでかたづけられ得ぬことと考えられる。そこで、成績不振、無気力傾向をもつ生徒が、自分のおかれている世界をどのように受け止め、どのように感じているのか、このような点について、いささかでもアプローチしてみたいというのがこの断片的な記録である。

II 対象生徒の概要

1 行動の概要

- (1) A (高校3年男) 成績不振、無気力傾向強く、かなりの寡黙である。友人がほとんどなく、つねに自分ひとりの世界に閉じこもり、静かで目立たない。非常に真面目で、人の嫌がるような仕事でもいわれたことは素直に行う。出欠状況は高校1年より3年の1学期まで、無遅刻、無欠席で、生活態度も、きびきびしたところは感じられないが、危かしさや乱れた傾向は見られない。
- (2) B (高校3年男) 成績不振、無気力傾向が強い。一見明朗だが、生活態度はなげやりで、遅刻が多く、授業中も落着きを欠く。1年時、バイク事故で長欠した。2年時(2学期)無断欠席、無断外出などで、厳重な注意を受け、学校をやめるといい出し、3日程休んで登校した。その後、これといった問題はなかったが、前述の傾向が続いている。3年2学期が始まると間もなく、喫煙中を発見され、停学処分になった。

2 家庭環境

- (1) A 父(49才)、母(51才)共に農業、兄(22才)事務員、妹(15才)中学3年、祖母(73才)。父母共に真面目な人柄である。本人と父母との対話はほとんどないが、兄妹とは仲が良くいろいろ話をする。家庭での仕事の手伝いは熱心に行う。静かな山村の平均的家庭。
- (2) B 父(44才)公務員、母(51才)家事、兄(19才)は現在東京に就職。本人は高校2年より兄が東京に就職し、事実上1人っ子の状態にあり、本人の要求はかなりスムーズに通るだけに、甘えの傾向が大きいように思われる。母はかなり細心に気を配り、き帳面な感じであり、父はおろかな

人柄である。友人が多く、2年時の一時期、彼の家がたまり場ようになっていた。

(表1) 学 業 成 績

(※ 1学期)

学年	教科	現国	古典	倫社	政経	日史	世史	地理	数学	物理	化学	生物	地学	体育	保健	音楽	英語	商一	計実	商簿	商経
1	学 年	2	2					2	2			2	2	3		2	2				
2	学 年	2	2	2			2		2		2			3	2	3	2	3	4	2	
3	学 年※	1	1		2	1			3	2				3	3		3		2	1	2

(表2) 職業適性検査の結果

G知能	V言語	N数理	Q書記	S空間	P形態	K運動
99	93	101	77	113	99	84

3 学業成績及び諸検査

(1) A

ア 学業成績(表1参照)

イ 知能検査 村山式知能検査 S D 5 4

(47. 6. 実施)

ウ 職業適性検査 特に指導を要するとの記載はない。(図1参照)

エ 職業レディネス・テスト 手工・技能の方面に自信をもっていることがわかる。

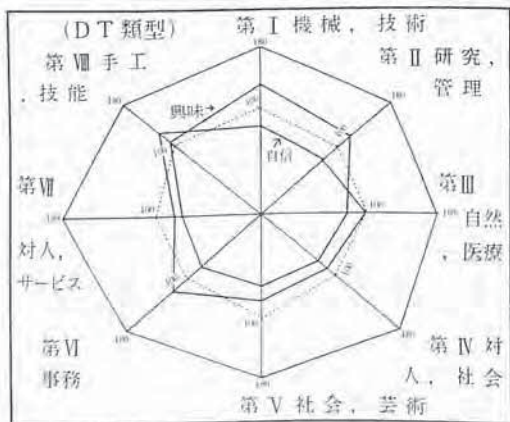
オ Y G性格検査 (図2)のY-G性格検査のプロフィールではC類に属し、おとなしく、消極的、安定したもの静かな性格で、活動性がなく、内向的で、およそ犯罪傾向とは縁のないタイプである。気分の変化が少なく、主観的で愛想がなく、社会的内向の傾向が強い。これはこれまでの筆者の観察結果と一致しているように思われる。

(2) B

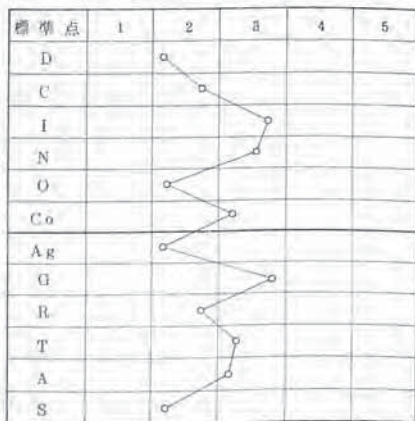
ア 学業成績(表3参照)

イ 知能検査 村山式知能検査 S D 5 4

(47. 6. 実施)



(図1) 職業レディネス・テスト・プロフィール



(図2) Y G性格検査プロフィール

(表3) 学 業 成 績

(※ 1学期)

学年	教科	現国	古典	倫社	政経	日史	世史	地理	数学	物理	化学	生物	地学	体育	保健	音楽	英語	商一	計実	商簿	商経
1	学 年	2	2					2	2			2	3	2		2	2				
2	学 年	2	2	2			2				2			2	2	3	2	3	3	2	
3	学 年※	1	1		2	1				2				2	1		2		2	1	2

ウ 職業適性検査 表4に示されているように、「運動」に指導を要するが、他は特に問題なく、「形態」においてはすぐれている。

エ 職業レディネス・テスト

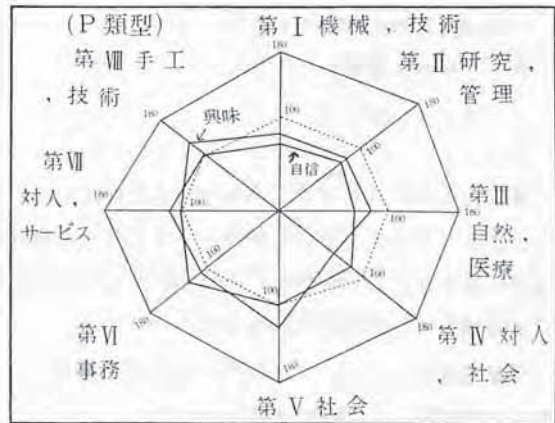
図3の職業レディネス・テスト・プロフィールでは、興味、自信ともに「手工・技能」に向いていることがわかる。本人の志望はデザイン関係の仕事である。

オ YG性格検査

図4のY-G検査プロフィールではAB類型に入ると思われる。特に抑うつ性が大きく、神経質でなく、やや主観的、ややのん気、やや社会的内向といった傾向がうかがわれる。ほゞ筆者の観察結果と一致するが、特に抑うつ傾向大というのは新しい事実である。

(表4) 職業適性検査の結果

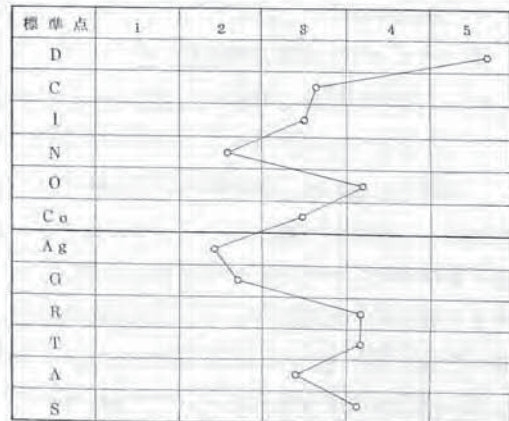
G 知能	V 言語	N 数理	Q 書記	S 空間	P 形態	K 運動
92	93	88	79	86	105	57



(図3) 職業レディネス・テスト・プロフィール

4 資料の分析の概要

A, Bの成績不振かつ無気力傾向は、中学時代(いや、もっと以前からか?)からの延長であり、特に学習成績に関しては、そのことが顕著であると思われる。両生徒の知能指数は他と比較しても、決して劣るものではない。Aの中学時代の「図工」の評定が「1」となっているのは、彼の自己表現の乏しさで、寡黙傾向の強さと一連のつながりをもつものとして理解されないだろうか。Bの場合は、気まぐれで、のん気、一方抑うつ性が大きく、集中力のなさが成績不振かつ無気力傾向を助長しているもののように思われる。



(図4) YG性格検査プロフィール

Ⅲ 指導方針

表面的にはかなり似かよっている面が見られるA・B二人なのだが、性格的に、環境的にかなり異なるものがあり、しかもわずかな資料と検査から、個別的な、かつ適切な指導方針は立てることができずただ大ざっぱに次のような点に留意することにした。

(1)できるだけ多くの接触の機会をもつこと。(2)受容的態度で相談を重ねること。(3)あまり不自然にならぬように、必要に応じて呼び出し相談をすること。

IV 実践記録

1 カウンセリング記録より

(1) A 第1回(5月1日, 約20分のうち一部)

(T: 教師 P: 生徒)

T いよいよ3年ということで, 今年は進路のことも具体的に考えないとね。どう, 自分の将来の方向について考えている?

P (沈黙90秒)

T 考えていない?

P うん。

T 具体的に不明でも, どんなことに興味が…?

P (沈黙70秒)

T 今年は何かクラブへ入ってみる?

P うんうん。

T 入る気はないわけね?

P うん。

T あゝそう。(後略)

ほとんど「うん」というだけで, さっぱり具体的な返事が返ってこない。これはなかなか手ごわい相手だと感じた。カウンセラーの方がじれったさを感じ, 話題を転々と変えたのはまずかったと思う。

第2回(6月20日 約10分)

進路相談ということで, 職業指導主事と相談する。この時もいろいろ尋ねられたが, 「うん」, 「いや」が数回返っただけの返事であった。

第3回(7月3日 約20分のうち一部)

T 家の仕事が忙しいか。

P うんうん。そんなでもない。

T 山菜採りは終わったかな。君なんか採った?

P ぜんまい少し。

T そう。楽しかったろうな。友達といったの?

P うんうん。(中略)

T そう。君の友達というと, 誰だったっけ?

P いない。(後略)

この時も話題の核心に触れてくると黙ってしまった。何か自分の心の事実を述べるのに抵抗ないし恐怖感のようなものを感じているように思えた。結局, カウンセラーとのラポートの欠如を感じさせられた。と同時に, 急にそれができるものでもないし, 日頃のH・R担任としての筆者の考え方なり, 態度をよく知っているAにとって, 受容的な態度での相談というのはかえって不自然に感じられたかも知れない。友人がいけないということのあたりが, 筆者のAに対して感じている問題点なのだが。

第4回(8月10日 約20分, 出校日)

T 夏休みも半分終わったけど, 計画うまくいっている?

P いや。

T あゝそう。この前, あなたのお母さんに会っていろいろお話ししたんだけど, 家で勉強しているってね。何やっていた。

P 簿記わからないから。

T あゝ簿記ね。簿記が苦手か。わからんときどうする。

P 兄にきく。

T 兄さんにきくか。それはいいね。(後略)

この時も以前と全く同じ物静かな態度で, 何かてれくさそうな表情がみられるだけであった。しかも,

彼自身は現在の自分の生活に不満があるようには見えなかった。

(2) A君の母親との相談(7月27日 約1時間, 成績不振ということで学校にきてもらった)

T お家の方では勉強していますか。

母 あまりしないね。今、中学ののと半分ずつにでもなればね。

T 中学のかたはよく勉強するんですね。

母 はあ、勉強もするし、活発だね。ただ、Aは小学校のときから自分で靴下やハンカチなどを洗濯していましたね。今でも兄が遅くなると風呂を沸かして待っています。

T なるほど、感心ですね。

母 小学校の頃、宿題忘れて寝たときなかなか朝起きなかったね。

T 宿題忘れたときにね。(中略)

母 無口なのは小学校からだね。下宿の人も前より大変しゃべるようになったと云っていました。人にもまれれば変わるんじゃないかね。

T そうですね。(後略)

Aの母親とはPTAなどで2, 3度お会いしているが、いつもながらおだやかで飾り気のない言動が印象に残る。この時、筆者はAの寡黙なことにふれたが、「人にもまれれば変わるんじゃないかね」というAの母親の自然な言葉に、寡黙傾向云々と問題視している筆者の無知を知らされた思いがした。「今、中学ののと半分ずつにでもなればね」と思いつつも、それぞれの子供の長所短所への深い思いやりが感じられ、筆者の指導が形式的・機械的なものに思えてならなかった。

(3) B 第1回(6月4日 約30分, うち一部)

T このところ遅刻がなくていい傾向だね。ところで中間テストうまくできた?

P あんまりやらなかった。やろうとしたけど寝てしまった。

T あゝそう。じゃあ赤点出てくるかな。

P うん、5科目かな。そんな勉強したって何になるのかな。

T そう思っているの。

P したってやっぱりそう思ってしまう。

T 家の方ではどんな風に時間をすごしている。

P レコード・ラジオを聴く。深夜放送も。

T 深夜放送もね。翌日困らない。

P 8時に起きても間に合うから。(後略)

かなり投げやりな彼の生活意識がうかがえた。勉強するでもなし、積極的に何かやろうという意欲があまり伝わってこない。彼の言動に衣を着せた様子はなく、いとも自然に自分の気持を表現していた。就職についても「何やっても同じだ。」という返事であった。何かに意欲を持たせたいと感じたが、それが何であるか、どうすればよいのかわからないので彼の言う事を聴くより方法なしと思った。

第2回(7月3日 15分, うち一部)

T どう? 就職の方具体的になった?

P うん、うん、何やっていいかわからない。

T そう。家の人は何といっている?

P お前の好きなように……。

T 君の好きなようにとね。県内がいいか。

P いや、県外がいい。

T 東京か。

P 東京でない方がいい。そして何か小さなサービス業がいい。

T あゝそう。小さなサービス業ね。どうして小さな方がいいの?

P 大きいと自分が見えなくなるような気がする。

T はあ、自分が見えなくなるようなね。

(後略)

進路の方はかなり具体的にサービス業という考えを持っているらしい。大きいと自分が見えなくなってしまうと考えている。その辺に、彼自身の世界観なり、自己観察の核心があるように思えた。

第3回(9月3日 約20分 自発来談)

P 先生、おれ進路変わった。東京にアルバイト行ってみて変わった。

T あゝそう。どんな風に。

P デザイン関係の学校に行きたい。

T 各種学校だね。

P はい。先生あの、試験なくて入れるところないでしょうか。

T はあ、試験なくて入れるところね。デザインは好きか。

P はい、好きというより、やってみたい。

(後略)

(4) Bの母親との相談 (7月29日 約30分, Bの成績不振につき召喚, その要約)

①健康上の理由でBには上の子のように十分手をかけてやれず、ばあちゃんにまかせきりの時期が長く続いた。②今困るのは、うるさくいうとかえって勉強しないし、放っておけばなおさらないということである。

2 日記(夏休み中に最少10日ということで日記をつけるようにいい渡した。)

(1) A 9月2日に提出できるかどうか尋ねたが、微笑を浮かべるだけで返事がなく、その後3回ほど時期を遅らして催促したが、例によって微笑を浮かべたまゝであった。自己表現の乏しい彼に日記をつけることをこれ以上強要するのは、彼をますます傷つけるように感じられた。だが、日記の提出にどのような感じを抱いたのか、それこそいま筆者の知りたいところなのだが。

(2) B (9月2日提出, うち一部, 原文のまま)

「8月3日土曜日。今までに仕事をしてもうつかれて来ました。まだ二週間もやっていないのに。もう遅刻を二回もしてしまいました。(アルバイト料はへるし、仕事もきつくなるんです。トテモ、/) (中略) お金をかせぐのはこんなにきついものなんでしょうか。こんなことなら学校の方がゼンゼンらくです。僕は世間をゼンゼン知らないのに、しっているふりをしただけだなんてこのごろ思うんです。」

V 反省

成績不振、無気力な傾向をもつ生徒ということで取り組んだのであるが、いささか主題の焦点が2人ということではぼけてしまった。筆者の考える無気力ということが、いささか主観に過ぎていなかったか。特に、A君との信頼関係がきわめて困難のように感じられ、型通りの呼び出し相談では彼の実存の場へ一歩も踏み入ることができないように感じられた。今後の最も大きな課題のように思われる。